

エネルギー、それはソローが語っている生命維持に欠かせないものとして私たちにもっとなじみ深く、ウォルデン湖では彼の「生計」のもと(章の基本概念)になっているもので、全生命の根幹をなすものである。したがって、環境的科学にも浸透しているが、それは単なる研究の「主題」にとどまらない。すべての生命体は、人間であろうと非人間であろうと、安定し、恒常的、継続的なエネルギーの流入(そして流出)に依存しており、呼吸や食べるという行為を通して最も顕著に体现される。これなしでは、すべての有機的生命体は衰弱し、最終的には滅びてしまう。

「生命」文学のように、「エネルギーの文学」は境界を越え、(横波のように)人間と自然の科学を横切り、横断している。もしも、それをマルクスの力学や生産の関係性の言葉で考えるとすると、エネルギーは科学全体、文化全体に推進するものであると言えるかもしれない。特にここ数世紀にわたって、資本主義の手段として利用され続けているが、エネルギーは、自然を変換すると同時に、破壊する威力にもなりうる。われわれはまずフロイトのリビドーと聞くと、無意識の心理要素としての「性的エネルギー」を想起するし、フロイトは実際に「文明は抑圧であり」つつも、他方で、「われわれが高い文明を持った国と呼ぶのは、人間の役に立つ一切のものが培われうまく手配されている国である。』『文明とその不満』92 頁)と述べる。しかしながら、人間の技術や技術に立脚した社会や文化によってもたらされた繁栄というのは、エネルギー資源の発見やその利用に依存し、ひいては「自然の脱自然化」を意図するものである。

この論考では、「野性の文化」がいまだ必要とされているというスナイダーの主張を解明しようとする。文明批評において、フロイトよりも革新的であるスナイダーは、詩、エッセー、書評を通して、どれくらい『人間的な、あまりに人間的』ナルシスト的な文化主義が自然の「脱自然化」に避けがたく結びついているかを示すのに労を惜しんでいない。

1. エネルギーの二つの様式: 食物連鎖と石油の流れ

スナイダーは、慈悲の詩人である。「私の後援者である野性の声を呼び戻す」(『亀の島』106 頁)のために、他の非人間のことを語り、また非人間の代弁をするだけでなく、「私は詩人」であり、「私の先達は他の詩人たち、アメリカ原住民、そして日本の仏教の僧侶である。」とも宣言している。(『亀の島』106 頁)

スナイダー詩の手法には、二種類のエネルギーがある。第一は、「古い骨」や「味覚の歌」に見られるような、食物連鎖のエコロジーを語るものであり、第二は石油の詩であって、例えば、「石油」や「使用説明書」、「百万年の船」や「エネルギーは永遠の喜び」が含まれる。「エネルギーは永遠の喜び」のタイトルは、もちろんブレイクの「天国と地獄の結婚」に関するものである。「古い骨」は、どのように人間(非人間)が食べ物を採るか、「生と死」の基本的な問題になりえているのかを示し、自然の大きな「エネルギー連鎖」のなかにある食物の不可欠な役割を明確にしている。(「私が食べたもの——だれが何を食べたか——どんなふうにして私たちは生き残ったか」、「外を歩きまわっている、注意深く食べ物を採りながら(中略)そこで岩くずの埃っぽい斜面には食べ物は無い」(中略)「どこかに 古い先祖たちの聖地があって、古い骨の土埃昔の歌や昔話。私たちが食べたもの 誰が何を食べたか どのようにして生き残ったか」(『終わりなき山河』10 頁 傍点筆者)ここでの「首句反復」は、「どこか」の感覚を広げている。「正確な位置」に関して、本質的な未解決性を強調することにより、この詩において、時空間の二元論が崩壊しているだけでなく、他の二元論も同様に弱められているのである。

「味覚の歌」において、スナイダーは、自然が「それ自体を食べる」、つまり「お互いの種を食べる 食べる ああ、お互い」(『波について』17 頁)という感覚を再び探求している。このエネルギー詩の主な趣旨は、「食べることは「古い骨」と同様に全くロマン化されていないことである。語り手の最終的な知覚は、エネルギー交換を促進するための、「お互いの種を食べる 食べる ああ、お互い」という行為を生態系が必要としたときに生じているのである。(『火を背にして』68 頁)生態学的に言えば、食べ物の第一の源はそれを発生させている最初のエネルギー、太陽のエネルギー、養分を生成する光合成である。したがって、スナイダーは木々や他の非人間を通して、太陽、光、光合成がいかに大切であるかを「光の使い方」という詩で語っている。(『亀の島』39 頁)マルキシズムの「労働」の価値理論を再度言及しつつ、スナイダーは有機物がいまだ地面で生命維持に必要な役割を果たしており、そこでは「光合成をする緑色植物は究極的には労働者階級である。」と述べている。

「エネルギーは永遠の喜び」において、スナイダーは再び西洋文明がもつ社会的、政治的、経済的勢力が「進歩」によるものであることに不満を示している。「私たちは喜んで未来と立ち向かう、私たちは化石燃料など必要としない 内なる力 より少なく成長する」、「内なる力を得る」という考えは、スナイダーの禅詩、「外ならず」(“Without”)のテーマに共鳴するものである。「自然の沈黙 内に 内なる力 その力 外ならず 道はどこへでも続く いや それ自身終わる 歌う その証 内なる力への証明として」(『亀の島』6 頁)このような「内的な力」は我々が求めているもので、「外的な」種のものではない。「外ならず」は、豊かなエコロジカルな意味を含有しながら凝縮されたエネルギーの詩となっており、自然とその威力のもつ道を取り上げているものである。アーサー・ウェリーによる有名な翻訳がある老子の『道徳経』、「道とその力」(1958 年)は、次のような一行から始まる。「道といえる道は不変の道ではない」(いくつかの翻訳と解釈があるが)ウェリーによれば、「道は内側であると同時に外側であるものであった。道家においては、すべての対極は入り混じっており、すべては調和的に対

比されている。」その詩において、「外ならず」は、「自然の沈黙」を横切って流れている「外的な」力を意味し、「水面のさざなみ」においてさざなみを引き起こす自立的かつ他律的な二つの力である。したがって、この道家の道は、内側と外側をつなぐが、私たちの内側にいつも戻ってき、そこでは内なる生命のエネルギーである「歌うこと」となるのである。詩の終盤に近づいて、読者は「癒し」と「救い」を、二つの野性の実践と同様に、得ることになり、西洋的なコンテキストよりも東洋的なコンテキストの中で、より明確に結び付けられることになるのである。

2. 不殺生というエコロジカルマインドに向けて

『文明とその不満』の第三章において、フロイトはその前提となった、人間の苦しみは次の三つからなる人間中心的な視点を論じている。(1)自然の圧倒的な力、(2)われわれ自身の肉体の脆さ、(3)家族・国家および社会における人間の相互関係を律する制度の不十分さの三つである。この書物の中心的な議論は、当然のことながら、「本能の欲求と文明の制限間にある治癒することのできない敵対関係にある。」ことである。フロイトにとって、「文明」という言葉は、ふたつの目的をもち、すなわち自然から人間を守ること、それらの相互関係を調整することである。しかしながら、フロイトの「我々の生命と動物の祖先とを区別する規制と成就の総計」を伴う文化の平衡状態は、明らかに強い人間中心主義をもつものである。

マイケル・セレスは、『自然の契約』(1995年)において、スナイダー同様、我々の文化的ナルシズムを反映する人間主義が過度に強調されていると主張している。「人間的な、あまりに人間的な」が明示している「社会契約」の啓蒙主義的な概念に対抗して、人間中心主義に相容れない思考である、「自然の契約」が、人間と自然環境の共生、相互関係をもととなることを述べている。セレスは地球が、力、絆、相互関係という言葉で我々に語りことができると述べ、これらの言葉は、人間に接触すると同時に契約することによって十分なされると述べている。したがって、「社会契約」は、自然と生命あるものをつみ入れて広げていくべきであるとする。

スナイダーの仏教(華厳や禅)的な視点に触れてみよう。スナイダーにとって、「仏教の伝統のもっとも重要な倫理的教えは、すべての自然に対する「非暴力」、「アヒンサー」(日本語で「不殺生」)である。「作家と自然に対する戦争」において、詩人は「他の生き物」だけでなく、「すべての生き物に対する敬意」を内包する言葉の意味に広げている。

「エコロジー、文学、そして世界の新しい秩序」において、スナイダーは、こう結論付けている。「生態学の分野に含まれる要素は人口変遷、植物や動物の推移、捕食者として被食者の関係、競争と協力、食物連鎖、生態系、生態系の中を流れるエネルギーなどである」。(山里勝己訳)スナイダーは、「生態系の内なるエネルギー」と同様に、腐敗のもつ夜行性、寄生的エネルギーである、自然の影の部分に特に興味を持っている。これは、「生命を与え、害をあたえないこと」であり、不殺生に基づくものである。エネルギーの文学である、エネルギーの詩は、我々が「エコロジー」と呼んでいる広範囲で、継続的で、内的空間のエネルギー交換を示唆するものである。スナイダーの詩学が「持続的である」所以は、詩や他の著作において、つねに真新しい表現があり、彼に影響されている作品や詩人において、彼の「内なると同時に外なる」作品に見られる、彼の強力なエコポエティックな「エネルギー」に心を奪われているからである。